旺盛な好奇心でサイバー分野に取り組む

20代の若手職員。大学では政治・国際関係を専攻。サイバー分野に関する知見は入庁後に会得しましたが、大学時代に培った安全保障的な観点は、サイバー領域における国家間の動向を分析するにあたって役立っています。

サイバー領域における国家間の紛争は、平時と有事の概念を相対化させつつ、戦術の洗練に伴ってその脅威を拡大させています。有事に至らない低烈度のサイバー攻撃が慢性化していることに加え、2023年に発覚したVolt Typhoonによる米国の重要インフラ等に対する長期潜入の事案では、有事における破壊工作が目的であったとの指摘もあります。また、戦術の高度化により脅威の捕捉は困難を極める状況です。

このような環境下において、我が国は、サイバー安全保障分野における対応能力の向上に取り組んでいます。2025年には、能動的サイバー防御の実現に向けて、サイバー対処能力強化法及び同整備法（令和7年5月16日成立、同年5月23日公布）が成立するとともに、総合調整役として国家サイバー統括室が設置されました。当室もサイバー領域に関する情報収集及び分析によって我が国のサイバー安全保障に貢献しており、その重要性は今後一層高まるものと思われます。

当室のサイバー領域に関する情報活動の対象は、脅威主体の活動からAIや量子コンピュータ等の先端技術の開発動向に至るまで多岐に及ぶため、サイバーセキュリティや先端技術に関する専門的・技術的知見が求められます。一方で、サイバー領域の環境変化の激しさや脅威捕捉の困難さを踏まえれば、日々の業務において最も重要なのは新たな事象に対する旺盛な好奇心であり、知見は好奇心によって会得することができます。また、「内閣の重要政策に関する」情報活動を行う当室の性質上、専門的・技術的知見を国家の安全保障の文脈に翻案する橋渡し役としての能力も求められます。さらに、民間が主要な活動主体であるサイバー領域においては官民連携が極めて重要であり、民間企業等との積極的な情報交換が求められます。そのため、他者と信頼関係を構築するためのコミュニケーション能力も重要な要素となります。

偽情報の収集・集約・分析と政策省庁との連携推進

20代の入庁1年目職員。大学時代の専攻は国際政治。大学卒業後、新卒で内調に入庁。趣味は体を動かすものが多く、最近は登山にハマっています。現在は実家暮らしで、最近はどのタイミングで一人暮らしをしようか模索しています。

AI技術の進展により、偽・誤情報の大量拡散やボットネットの展開が容易に実行されるようになり、外国勢力による影響工作の脅威は一層深刻化しています。実際、欧米諸国をはじめとする各国において、外国勢力による世論形成への不当な干渉事例が報告されており、国際社会全体で警戒を強めています。我が国の状況を見ても、日本の政策に対して信頼を損なわせる、又は民主的プロセスや国際協力を阻害するなどの目的で偽・誤情報の拡散が見受けられます。これらの問題は民主主義の根幹を揺るがしかねない脅威であり、政府が一体となって対策を行う必要があります。

このような状況において、内調における偽情報等の対策は、主に2つ挙げられます。

1つ目は、外国による偽情報の拡散等を含む影響工作の情報について、収集・集約・分析を行うことです。内調では、我が国の安全保障・主権等に否定的な影響を与えたり、社会的な混乱（災害時や選挙期間中等）を引き起こすことなどにより、内閣の重要施策に影響を与えたりする意図で拡散される、偽情報等について、収集・集約・分析を行っています。

2つ目は、政策官庁と情報官庁をつなぐ役割として連絡・調整を行うことです。具体的には、官邸や政策官庁から伝達された情報関心を我々が情報官庁に共有します。その関心に基づいて、我々で収集・分析した結果や各省庁で行われた分析結果を集約し、迅速に政策省庁に共有します。

我々は、政策官庁等が行う正確な情報発信など、偽情報の拡散等における対応の判断に資する分析結果を提供しています。

ここで私の日常業務の一つを紹介すると、公開情報からの情報収集があります。具体的には上記に記したような関心事項に沿って、Webサイトや政府刊行物等、世間に公開されている情報を集めます。ここで集めた情報から、分析対象として資料を作成することもあります。このような資料は、官邸幹部への報告に使用されることもあります。

この分野は、生成AI技術の進展等に伴って、日々めまぐるしく情勢が変化します。そのため、常に「新しいことを学び続ける姿勢」が大切だと感じます。私も日々勉強を続けながら、様々な経験を積んだ上司の下、非常に充実した毎日を過ごしています。ぜひ皆さんも我が組織の一員として、この分野に挑戦していただきたいと思います。

国家安全保障局（NSS）で培った経験を活かし インテリジェンス機能の強化に取り組む

30代の中堅職員。大学時代は国際法・国際政治を専攻。内調入室以来、国際部門・NSS・CTUといった国際分野を中心にキャリアを重ね、現在は「インテリジェンス機能の強化」に向けた取組に日々奮闘中。

近年、国際環境の複雑化や社会経済構造の変化を背景に、安全保障の対象は外交や防衛にとどまらず、技術、貿易、投資、サプライチェーンといった経済分野へと拡大しています。国家・国民の安全を経済面から確保することが不可欠とされる中、我が国でも経済安全保障に関する制度の整備・強化が進められてきました。

2020年には、経済安全保障政策を政府横断で推進するため、国家安全保障局（通称NSS）に新たに「経済班」が設置され、2022年には、重要物資及び基幹インフラ役務の安定供給確保、最先端重要技術の開発支援、特許出願の非公開制度等を柱とする「経済安全保障推進法」が整備されるなど、いまや経済安全保障の確保は国家政策の中核に位置付けられています。

こうした政策の転換期に、私は2年間、NSSの「経済班」に出向しました。内調においても、経済安全保障に関する情報の収集・分析や、インテリジェンス・コミュニティのとりまとめとしての政策部門への情報提供に携わっていましたが、NSSにおいて政策実務に関与したことで、インテリジェンスが政策部門においてどのように活用されているのか、そして、インテリジェンス・サイクルの全体像を把握することができたと感じています。

さらにNSSでは、経済界からの海外事業の展開を見据えた主要国と整合性のある情報保全制度の整備を求める声を背景とした、経済安全保障分野におけるセキュリティ・クリアランス制度の企画・立案にも携わりました。経済界・労働界・法曹界など幅広い関係者との意見交換に加え、有識者会議や経済安全保障推進会議の開催など、多岐にわたる業務に関与しましたが、2024年に「重要経済安保情報保護活用法」が成立した際は、これら検討の数々が制度として結実した瞬間でもあり、感慨深いものがありました。同法は、政府が指定した重要経済安保情報について、一定の信頼性を確認した者のみが取り扱う仕組みを定めるものですが、この法整備により、内調が所管する「特定秘密保護法」とあわせて、我が国の情報保全措置は一層強化されることとなっています。

現在は内調において、総理肝いりの政策である「インテリジェンス機能強化」に向けた取組を進めています。NSSで培った経験を活かしながら、内調のインテリジェンス司令塔機能の強化に携われていることに、日々、大きな責任とやりがいを感じています。国益を守り、国民の安全を確保するために政府が的確な意思決定を行うためには、質が高く、時宜に適った情報の収集・分析が不可欠です。政策部門と情報部門の双方を経験した立場から、これからも我が国のインテリジェンス機能の強化に貢献していきたいと考えています。

人事担当者から一言

入庁前から関心を持っていた分野で活躍している職員もいれば、思いがけず新たな分野に取り組み、その魅力に引き込まれて、やがて自らの専門としていった職員もいます。職員一人一人に「どのようにして専門性を培ってきたのか」というストーリーがあります。

そうした歩みに共通しているのは、常に学び、自らをアップデートし続ける姿勢です。

私たち人事担当者は、定期的なヒアリングを通じて職員のキャリア志向を丁寧に把握し、スキル向上に必要な経験について、職員と一緒に考えています。

「こういうことがやりたい」という前向きな提案も歓迎しています。新たに職員として迎える皆さんの潜在力を引き出し、その可能性を拡げるお手伝いができることを楽しみにしています。

衛星画像の分析

情報収集衛星画像（加工処理画像）の判読例

下の画像は今治市山林火災（令和７年３月下旬）を撮像したものです。

衛星画像は広い範囲を俯瞰してみることができるため、被害の全体像を把握することができます。森林において黒く写っている部分が焼損箇所であり、その被害が広範であったことがよく理解できると思います。

また、引きの画像ではわかりづらいと思いますが、煙とみられるモヤがかかった箇所があることや消防関係車両が複数地点で展開しているとみられる状況から撮像時点では延焼中の可能性があります。

これらに加え、例えば道路の状況（土砂や倒木で塞がった地点がないか）や送電線関連施設の状況を判読することで、より詳細に被害の程度を把握することもあります。

撮像日時：2025年03月26日午前

画像分析官の業務説明

画像分析官の仕事は、画像に何が写っているかを読み取り（判読）、その場所で具体的に何が起きているかを考える（分析）ことです。上の例でも、どの範囲が焼損しているか、その範囲内に何があるかという判読に加えて、それによりどういう影響が発生した可能性があるかを分析しています。

上の例では衛星画像のみから何が分かるかを紹介しました。実際の分析業務でも、画像分析官は衛星画像だけから細かな現場の状況を分析することが多々あります。特に国外の出来事を分析する場合は、現地からの情報がない、もしくはあったとしても信用できないことがあるからです。

我々の強みは衛星画像という、「実際にこの目で見た」情報を使えることです。その強みは分析官が先入観を持たずに画像を見なければ活かすことができません。画像分析官は日々、国際情勢に関心を持ち、ニュースなどに目を配りつつも、時にはそれを一旦頭から追い出して画像に向き合うことがあります。

入庁８年目の職員です。大学では英文学を専攻していました…が実は英語が苦手。読むのはまだしも喋るのは全然自信がありません。趣味は読書とゲームのインドア派。鳥が大好き。

在外勤務・留学

大使館への出向 ～ヒューミント能力を海外で活かす～

30代の中堅職員。都内私立大学において法律学を専攻。部活動で培った体力と根気、フットワークの軽さが強み。開拓者精神の下、新規事業で業務経験を積む。入庁後から英語や専門事項を独学。

滝のようなスコールの中、コロニアル調の大衆宿舎を横目に、大使館に急ぐ。「明日の総理報告のために、現地情勢を聴取してきて欲しい」東京から電話でそう告げられたのは、３時間ほど前であった。日本との時差を考えると、作業時間はごく僅かしかない。気持ちを落ち着かせつつ、今し方関係者から聴取した内容を頭の中で反芻し、報告すべき内容をまとめる。緊張感や切迫感があるが、それと同時に、「この仕事をするために内調に来たのだ」と改めて実感する瞬間である。

インターネットの発展によって日本でも現地報道をフォローできるようになり、また、ソーシャルメディアやAI等の先端技術も発展してきたが、社会が人によって構成される以上、人を通じた情報収集、すなわちヒューミントが必要とされる領域は依然として存在する。よく「最後の手段（last resort）」と称されるヒューミント。その目的は、公開情報等の通常の手段では得ることができないmissing pieceを入手することにある。担当官は、様々な点を考慮することによって円滑な面会を実現し、それと同時に、現地情勢を確実に把握した上で、面会中に的確な質問を投げかけなければならない。ヒューミントとは、知的な作業の結集体である。

初めからヒューミントを十分に実施できる者はいない。様々な機会を通じて技術や知見を体得し、実経験を積み、自己を省みて絶え間なく改善していく。この積み重ねこそが不可欠である。筆者自身、入庁時点では語学力が低く、国際情勢に疎かったため、将来的に自分が在外公館においてヒューミント活動を実施することになるとは想定していなかった。しかしながら、入庁後に様々な形で自己研鑽を積むための機会が付与され、大使館での勤務に至ることができた。現在は、大使館勤務において培った知見を組織や後進等に対して還元すべく、日々業務に当たっている。

厳しさを増す安全保障環境を踏まえれば、内調の職員が在外公館で勤務する機会は、今後一層増えるだろう。そうした状況にあって、自らの意思に応じて道が開かれ得ること、これこそが内調の特色の１つであると信じている。高い志を有した方々と将来同じ領域で活動できることを、心待ちにしている。

人事院の制度を利用した留学 ～ワシントンDC～

内調では人事院の制度を利用して行政官長期在外研究員として海外大学院に留学することができます。私はワシントンDCにあるジョンズ・ホプキンス大学のSAIS（高等国際関係大学院）に在学していますが、この安全保障で有名な大学院において日々実感するのは、周囲からのアジアへの強い関心と日本への信頼及び期待です。また学問としてのインテリジェンスの研究が盛んであり、SAIS（およびワシントンDC）の学生たちがインテリジェンスに強い憧れを抱き日々勉学に励む姿に触れるたびに、大きな刺激を受けます。このように日本やインテリジェンスを組織の外側から見る機会を得て、我が組織に対する期待や求められているものが理解できるようになり、内調に対する思いや見方は一層ポジティブなものに変化しています。これは日本でのせわしなく過ぎていく日々のなかでは得がたい経験であり、この学びを得られただけでも留学をしてよかったと強く思います。日本で生まれ育ち、主に研修や業務を通じて身につけた英語なので授業中等苦労することももちろんありますが、新たな友人たちとの日々の会話、食事、お酒、旅行等すべてが新しく刺激的で、充実した毎日を過ごしています。

海外語学留学 ～ソウル～

語学留学で赴いたのは、大韓民国・ソウル。東京での業務から離れ、語学に専念することで、これまで課題としていたことに正面から向き合うことができ、今後の課題も明確になりました。また、現地の人々のように生活し、交流することで、その国の文化や考え方などを肌で感じられたことは、分析担当官にとって大きな財産です。結びに、当室を志す学生の皆様に現地語で一言。

“뜻이 있는 곳에 길이 있다（志あるところに道あり）”

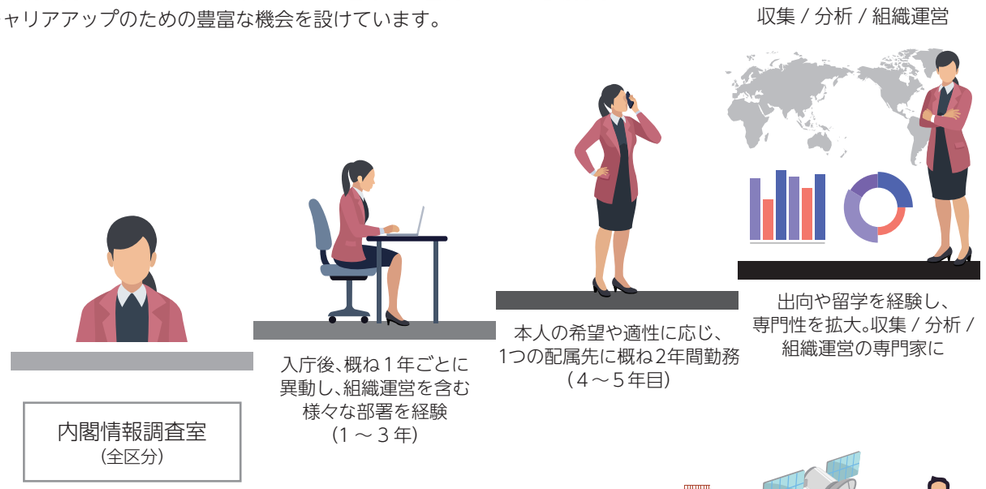
当室で一緒に働き、道を切り拓いてみませんか。

海外語学留学 ～台北～

「報告資料の質を高めるにはどうしたらよいか」分析業務に携わる職員として、日々この問いについて考えていた折、台北への中国語留学の機会をいただきました。留学中は自らの視野を広げることを意識し、語学学校に通うと同時に現地の友人と互いの言語を用いて積極的に交流し、週末には台南や金門島など各地を巡りました。現地を歩き、現地の人々の思いを知ることができたこの経験は、自らの分析力の底上げにつながるものと確信しています。

キャリアパス

日本のインテリジェンス・コミュニティの柱となる人材の育成を目指し、内閣情報調査室では様々な研修のほか、他省庁への出向、在外公館勤務等、キャリアアップのための豊富な機会を設けています。



▶人材育成・キャリアアップの機会

新任者研修

新規採用の職員向けに複数回に分けて実施します。社会人・公務員としての基本的な教育からはじまり、秘密保全教育、情報機関の役割、各部門の業務、日本のインテリジェンス体制及び内調の全体像を具体的に把握し、我が国のインテリジェンス・コミュニティの中核となる情報の専門家の素地を作ることを目的としています。

語学習得の支援

語学学校への通学補助や、組織での研修を行っています。また、海外の語学学校に数か月留学する機会もあります。

研究員派遣制度

人事院の研修制度（行政官長期在外研究員制度、行政官国内研究員制度等）を活用して、専門性に磨きをかける機会を設け、職員がスキルアップできる環境を整えています。

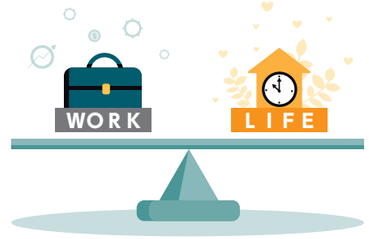
他省庁への出向

専門性を強化し行政事務経験を積むため、インテリジェンス・コミュニティ省庁（警察庁、公安調査庁、外務省、防衛省等）や内閣府等への出向の機会があります。

在外公館勤務

内調職員として培った知識・経験を生かして海外で勤務します。在外公館勤務は国外で多様な人々と仕事をする貴重な機会であり、希望する職員には積極的に機会を与えています。

ワークライフバランス



内閣情報調査室では、職員のワークライフバランス実現に向けて、各種制度の推進に取り組んでいます。

Column

（40代 女性）

第二子の育休明けから総務部門に所属する職員です。現在「育児時間制度」を利用し、毎日２時間勤務時間を短縮しています。この２時間はとても大きく、「あと２時間あればもっと仕事を進められるのに！」と悔しく思う日もあれば、「この２時間がなければ今日の育児はこなせなかった…」と１日を乗り切れたことに安堵する日も多くあります。「育児時間制度」の他にも「フレックスタイム制」により退勤時間を調整し、子どもの学校行事や通院等に対応しています。子どもの急な体調不良などで休む機会がどうしても多くなってしまいますが、なるべく仕事に穴を空けないよう勤務時間を柔軟に調整することができ大変助かっています。職場では時短で不在となる分、周囲とのコミュニケーションを大切にしていて、それが仕事の楽しさのひとつにもなっています。周囲の理解と支援の下、業務分担の面で配慮いただきつつも新しいことに挑戦する機会にも恵まれ、充実した日々を送っています。

6:00 起床
早く登校する長女に合わせて起床。長女登校後、保育園児の次女を起こすまでの２０分間は夫婦の打合せタイム。

9:30 登庁
時短勤務のため常に優先順位・効率を意識。滞在時間が少ない分、日ごろの周囲とのコミュニケーションが重要に。

16:20 退庁
もう終業時間！明日の仕事の流れをイメージしつつ慌ただしく退庁。職場を出たら帰宅後の家事・育児の流れを確認。

17:20 帰宅
次女を保育園に迎えに行き、習い事が終わった長女と途中で合流し一緒に帰宅。帰宅後は明日の予定を確認しつつ夕食準備。

18:30 夕食
夕食は唯一家族がそろう時間。各々が今日の出来事を話したりする。最近は地名クイズの出し合いがブーム。

19:30 夕食後、育児等
夕食・入浴後は習い事の練習。長女と次女の練習のタイミングが重なると揉めるので、家事の傍ら上手く誘導。

21:30 就寝
21時には娘たちを寝かせたいと思いつつ、今日もなんだかんだでこの時間。大人も子どももお疲れ様でした。

▶各種制度

産休・育休制度

- **産休制度(女性のみ)**
  産前６週間～産後８週間までの期間に取得可（有給）
- **「男の産休」制度**
  配偶者の出産に際し合計７日間の休暇を取得可（有給）
- **育休制度(全職員)**
  子が３歳に達する日までの期間取得可
  ※特に男性職員については、生後１年の間に１か月以上の取得を推奨しています。

育児に係る時間短縮制度

- **育児時間制度**
  小学校就学前の子を育てる職員（男女問わず）が、勤務時間の始めか終わりに２時間まで無給休暇取得可
- **育児短時間勤務制度**
  小学校就学前の子を育てる職員（男女問わず）が、希望する日・時間について適用可

各種休暇制度（有給）

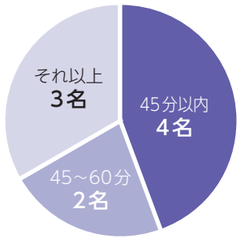
- **年次有給休暇（年休）**
  理由を問わず取得できる休暇。毎年20日ずつ付与され、前年の未使用分は20日まで繰り越し可
- **特別休暇**
  用途の定められた休暇。冠婚葬祭や夏季休暇（３日）など
- **子の看護等休暇**
  小学校３年生までの子を育てる職員（男女問わず）が、１年に５日（子が２人以上の場合は10日）まで取得可
- **病気休暇**
  入院や手術等、私傷病により休まなければならない場合、最長３か月間取得可
- **出生サポート休暇**
  不妊治療に係る通院等のために、１年に５日（体外受精及び顕微授精の場合は10日）まで取得可

Interview

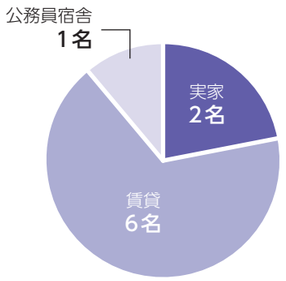
本室採用１年目職員に聞いてみました

内閣情報調査室では、採用１年目の職員も第一線で活躍しています。様々なフィールドで活躍する１年目職員９名の声をお届けします。ぜひ、内調に入ってからのイメージを膨らませてみてください！

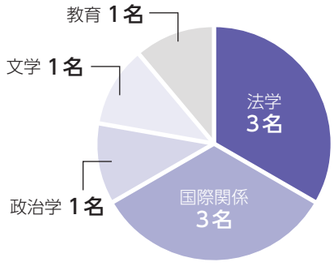
Q1 職場までの所要時間は?



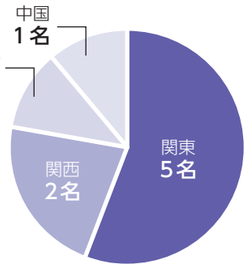
Q2 現在の住居形態は?



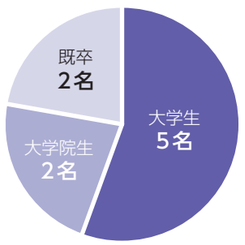
Q3 大学（または大学院）での専攻は?



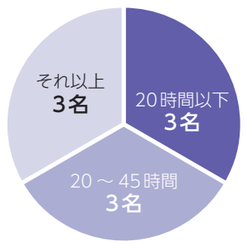
Q4 出身は?



Q5 官庁訪問時の身分は?



Q6 １か月の平均残業時間は?



Q7 官庁訪問で印象に残ったエピソードは？

- 面接官とのやりとり。堅い雰囲気での面接になると思っていたが、緊張感はありつつも柔らかい雰囲気で行われたこと。インテリジェンスの専門家としての「プロ意識」「使命感」のようなものを言葉の節々から感じた。
- 訪問者同士の距離が近かったこと。待ち時間に自由に会話してよい雰囲気だったことが印象に残っている。

Q8 休日の過ごし方は？

- 体を動かすのが好きで、ジムに行ったり、登山をしている。
- 読書。大学時代にはピンと来ていなかった古典的研究の価値をその分野の業務を担当することで理解できたり、社会人が主人公の漫画への共感が深まったり、読み方が変わったなあと感じている。
- 同期をはじめ、色々な友人と遊ぶ。飲む。たくさん寝る。
- 連休や夏季休暇などで積極的に旅行。愛媛に旅行した際には同地出身の上司からおすすめの居酒屋を紹介してもらい、ローカルな味を体験できた。

Q9 入庁前後で感じたギャップは？

- 各省庁からの出向者が多いこと。色々な方々の協力を得て、仕事ができているということを実感できる。
- 想像以上に官邸との距離が近いことに驚いた。比較的簡易なものだったとはいえ、自分がメインで作成した資料が官邸への報告で使用された。時には報告を受けた官邸幹部の様子なども上司経由で伝えられることもある。
- 華やかなイベントもあるが、情報収集等では地味な場面の方が多い。ただし、そうした作業も質の高いインテリジェンスを生み出すために不可欠だと感じている。
- 男性社会で女性職員の数は極端に少ないと入庁する前は想像していたが、想像していたよりも女性職員の数が多く、多数の女性職員の方々が活躍されていた。
- プロパー職員の誰もが組織の将来やあり方について深く考えていたこと。
- 上司との距離も近く、相談がしやすい環境が整っていること。

Q10 これまでの業務で印象に残ったエピソードは？

- 急な案件で総理報告を作成したこと。大変ではあったが、達成感を感じたことや、改めてこの職場で働く意義を感じた。
- 海外の専門家との協議に出席したこと。若手職員も協議に参加させてもらいやすいと思う。
- 幹部へのブリーフィングの際、幹部からの質問に的確に答えられたことがとても嬉しかった。
- 国会答弁の作成に関われたこと。
- １年目から幹部の部屋に一人で入り、説明をすることは衝撃的だった。

Q11 職場環境や上司・先輩は？

- 上司から休暇の取得を奨励されるので若手でも休暇が取りやすい。
- ワークライフバランスが充実しており、雰囲気もいい。
- プロパーか出向で来ている方かどうかに関わらず、それぞれが経験を重ね自分にはない能力・見識を持った尊敬できる方々ばかり。中には日本トップレベルと呼ばれる人もいて、この分野を極めた人とはこういう人なのかと思わされる。
- 話好きの方が多い印象。
- 困った時に的確なアドバイスをもらえる心強い先輩や上司が多い。
- 上司は時に厳しく時に優しく、自分を育てようとしてくれる熱意がひしひしと伝わってくる。

Q12 入庁前にやっておけばよかったことは？

- 長期間の海外旅行に行く。
- 特にないが、TOEICとか何か目標があるのであれば、学生のうちに達成しておくべき。
- 自分の興味・趣味に打ち込み、知識の幅を広げておけばよかったと感じている。
- 就職と同時に地元を離れて東京に出てきたので、東京に出たらなかなか会えなくなってしまう家族、親戚、友人ともっと思い出を作っておけばよかったと感じる。

１年目職員の１日

Aさんの場合（総務部門・国会担当　男性）

8:30	登庁。国会で質問が当たっているため、幹部等への配布資料の準備を行う。国会会期中は常に国会の動向を確認する。
10:00	他省庁からの照会依頼が接到。国会の業務と並行し、上司と相談しながら対応方針を決定する。
11:00	決裁時の説明に向けて、可能な限り資料を収集する。この作業が将来の情報収集活動にもつながると思うので力が入る。
12:00	昼食。上司と行きつけの定食屋へ行く。今後役に立ちそうなことも聞くことができるので有意義な時間になる。
13:00	明日以降の委員会における質問が続々と接到する。内調に関係する質問を見落とすといけないので緊張感をもって確認する。
15:00	午前中に準備した決裁を仰ぐ。ここで上司がどこに注目していたのかを確認することが、今後の業務の役に立つはず。
18:30	帰宅。新宿駅にあるラーメン屋に直行し、いつもの餃子セットとビールを注文。自分へのちょっとしたご褒美。

Bさんの場合（国際部門・朝鮮半島分析担当　女性）

8:00	登庁。フレックス制度を利用して、早めに登庁。ニュースや新聞を見ながら、担当地域の情勢をインプット。
10:00	収集した情報を把握しながら、担当地域の情勢を分析し、総理に報告するための資料を作成。
12:00	ランチ。同期とたわいもない話をしながら食べる。時々、庁外に出て、定食が有名なお店に食べに行くことも。
13:30	担当地域に関係する有識者との勉強会に出席。有識者の見解を聞きながら、業務に活かせる知識をメモ。
15:30	上司と担当地域について議論しながら、朝作成した資料を適宜修正していく。上司は担当地域のプロなので、新たな知見を多く得られる。
17:30	退庁。同期や年次の近い先輩と近くの居酒屋へ。一週間の疲れをいやしリフレッシュできるので、毎回楽しみにしている。

内調に関するQ&A

Q1 情報機関というと、暗いオフィスで秘密の仕事をしていたり、映画のような派手なイメージがありますが本当ですか？

映画や漫画などの創作物の影響で、情報機関員、ひいては内調の職員が派手な仕事をしていたり、裏の世界で謎めいた仕事をしているようなイメージを持っている方は少なくないでしょう。ですが、実際の我々の業務は映画のような派手なスタンドプレーではなく、地道なチームプレーが求められます。業務の性質上表に出る情報は少ないですが、我々も行政機関であるため、法律に基づいて日々の業務を遂行しています。

Q2 どのくらいの語学力が求められますか？

語学力はあればあるほどよい…ですが、採用時点で必ず高い語学力が必要というわけではありません。内調という組織の性質上、語学ができることで担当できる業務の幅が広がり、深みが増します。英語だけでなく、日本にとって安全保障上関心が高い国の言語などに習熟した人も、活躍の場がたくさんあります。一方、採用時点で高い語学力を有していなくても、それを身につける意志がある方は大歓迎です。内調では職員の語学力向上支援を行っており、内調に入るまで全く触れたことがなかった言語をハイレベルで身につけた職員もいます。
語学ができること＝その言語を用いる国の情報収集や分析ができる、というわけではありません。実際の情報収集や分析では、文化、風習、技術、歴史的背景や政治情勢等、様々な分野に対する知見、それらを総合する知性と臨機応変な反応が求められます。語学はあくまで情報収集や分析のための一ツールであるという意識を忘れずに、さまざまな知見と経験を培っていくことが求められます。

Q3 内調に向いているのはどんな学部の人ですか？また、どんな人が活躍できますか？

内調は業務の幅広さ故に文理を問わずどのような学部の人でも活躍の場があります。元は他省庁や民間企業で勤務していた職員も多く、バックグラウンドは非常に多様です。
また、現在内調が扱う業務の範囲は、伝統的なインテリジェンスの領域だけでなく、サイバーや偽情報といった最新の技術をベースにした領域にも拡大しています。加えて、今は影も形も見えない分野を将来的に内調が扱うこともあるかもしれません。ですので、どのような専門を持った方でもそれを活かせる可能性はあります。そしてそれ以上に、自分の能力がどのように活かせるかを考える力、未知の領域でも積極的に理解しようとする好奇心が必要になってきます。

Q4 官庁訪問はどのように行われますか？面接の回数も多いと聞きますが本当ですか？

主に１対１で職員と面談することによって、訪問者のことを深く理解するように努めています。また、複数回の面談で、訪問者について多角的に把握することを目的としています。

Q5 一般的な総務系の業務や、官房業務も多くあると聞きますが本当ですか？

これらの業務は公務員としての基礎的な業務であり、いわば公務員･社会人としての「基礎体力」を養うことができます。このような「基礎体力」を抜きに情報業務で高い成果を挙げることはできません。
また、組織というものはこれらのバックオフィス業務に支えられており、仕事を通じて組織全体を俯瞰できたり、組織の未来について真剣に考える機会にもなります。

Q6 国家公務員はワークライフバランスが取りづらいというイメージがありますが、内調もそうなのでしょうか？

超勤時間は部署やポジションによる面があり一概には言えませんが、組織全体として、ワークライフバランスを尊重しています。各種休暇制度も充実しており、実際に活用されています。ただし、国家公務員である以上、全体の奉仕者としてプライベートよりも職務を優先しなければならない場面が存在することは確かであり、そのような意識は持っていて欲しいと思います。もちろん、介護や育児など個別の事情については配慮されるので、遠慮なく相談してください。

採用について

内閣官房は基本的に各省庁からの出向者で構成されていますが、内閣情報調査室はその中で唯一、独自の定期的採用を行っています。内閣情報調査室は、国家公務員採用一般職試験（大卒程度）の全区分の合格者から採用を行っています。

採用数一覧表

※（ ）内は女性の数

試験年度	内閣情報調査室			内閣情報調査室内閣衛星情報センター		
採用試験区分	行 政	技 術	教 養	行 政	技 術	教 養
令和４年度	8（2）	0	—	—	6（2）	—
令和５年度	8（1）	0	—	—	6（3）	—
令和６年度	9（4）	0	—	—	3（2）	—
令和７年度	8（3）	0	5（4）	2	5	0
令和８年度	**20名程度**			**10名程度**		

制度・待遇

初任給（令和８年度現在）

一般職（大卒程度試験）合格の場合
行政職（一）１級25号俸　287,600円
（地域手当、本府省業務調整手当含む）
※大学院卒、社会人経験のある方は俸給月額が加算されます。

賞　与（ボーナス）

期末手当、勤勉手当として、年間4.65月分

諸手当

扶養手当、通勤手当、住居手当、超過勤務手当等

勤務地

内閣府本府庁舎（東京都千代田区永田町1-6-1）、
内閣衛星情報センター（東京都新宿区市谷本村町9-5）

勤務時間

原則９：30～18：15（勤務時間変更制度活用可）

休　日

年次有給休暇20日間（４月採用者は、その年の12月まで15日間）
特別休暇（夏季、結婚、忌引等）
※仕事と育児･介護の両立を支援する制度があります。

福利厚生

共済組合制度（医療費の給付、診療所、契約施設（保養所等）の補助）、グループ保険制度（団体保険、団体積立）、診療所（内科、歯科）、定期健康診断、人間ドック

2026年度採用スケジュール

採用担当者から皆さんへ

「内閣情報調査室…、一体どんな組織なんだろう…。」そう思っている方が多いでしょう。私自身、聞き慣れない組織の説明会に恐る恐る足を踏み入れた者です。

私たちの仕事は、情勢の変化を敏感に察知し、その背景を冷静に見極め、今後起こり得る事態を予測することによって、総理をはじめとする政策決定者の判断を支えることです。職員一人一人の貢献が、陰ながら国民の安全と社会の安定につながっています。

情報の重要性への認識が高まり、当室の役割が拡大するにつれて、職員に求められる専門性は多様化しています。語学力はもちろん、国際政治学や統計学など分析に活かせる知見、情報システムやサイバーに関する知見、先端技術の活用経験をお持ちの方は、大いにご活躍いただけると確信しています。また、完成された知識や技能はなくとも、未知の問題に果敢に取り組む力、先入観にとらわれずに考え抜く力を持った方を歓迎します。

当室は組織の規模が比較的コンパクトであるため、若手のうちから、総理の目・耳としての役割を果たしている実感、インテリジェンス・コミュニティの要として機能している実感を持つことができるチャンスが多く巡ってきます。時として困難な課題に直面することもありますが、当室に採用された職員は、自らの持つ力を最大限発揮して、誠実に仕事に取り組むことで、「情報のプロフェッショナル」となり、成長を続けていきます。

皆さんが持っている可能性が、当室の将来を作っていきます。当室のことをもっと知っていただけるよう、職員の生の声をお届けし、皆さんの疑問を解消するお手伝いをしたいと思いますので、ぜひ説明会に参加してみてください。

採用スケジュール

5月31日	第一次試験日
6月24日	第一次試験合格発表
6月25日	官庁訪問予約受付開始
7月2日	官庁訪問開始
7月8日～24日	第二次試験（人物試験）日
8月12日	最終合格発表日
10月1日	採用内定

説明会情報

採用ホームページをご確認ください。
https://www.cas.go.jp/jp/saiyou/saiyou_index.html

連　絡　先

内閣情報調査室
採用専用TEL
03-5253-2107

内閣情報調査室内閣衛星情報センター
採用専用TEL
03-3267-9564

内閣情報調査室の歴史と発展

内閣情報調査室は、戦後、我が国が再び国際社会の荒波に耐えうるよう、旧総理大臣官邸の小さな一室で産声をあげました。着実に発展の道を歩み続けてきましたが、戦後最も複雑で厳しい現今の安全保障環境において年々組織の重要性が高まっています。

今、当室はインテリジェンス機能強化に向けて、組織発足以来最大の変革の時を迎えています。この変革をともに成し遂げ、新たな歴史を作っていきましょう。

Beginnings 1952

1952	昭和27年4月9日 第3次吉田内閣	内閣総理大臣官房調査室 （総理府の組織として新設）
1957	昭和32年8月1日 第1次岸内閣	内閣調査室 （組織改編により内閣官房に）
1986	昭和61年7月1日 第2次中曽根内閣	合同情報会議を設置 内閣情報調査室 （内閣官房の組織再編により名称が変更）
1996	平成8年5月11日 第1次橋本内閣	内閣情報集約センターを設置 （緊急な重要情報を24時間体制で収集し、内閣総理大臣等へ報告する）
1998	平成10年 10月27日・12月22日 小渕内閣	内閣情報会議を設置 情報収集衛星の導入について閣議決定
2001	平成13年1月6日 第2次森内閣	内閣情報官を設置 （中央省庁再編に伴い内閣情報調査室長から格上げ）
2001	平成13年4月1日 第2次森内閣	内閣衛星情報センターを設置 （情報収集衛星の開発・運用、画像情報の収集・分析）
2008	平成20年4月1日 福田内閣	カウンターインテリジェンス・センターを設置 （外国の情報機関による情報収集活動から我が国の重要な情報や職員等を保護） 内閣情報分析官を設置 （特定の地域または分野に関する特に高度な分析）
2014	平成26年12月10日 第2次安倍内閣	「特定秘密の保護に関する法律」の施行 （内閣情報調査室が特定秘密の保護に関する企画及び立案並びに総合調整事務を所掌）
2015	平成27年12月8日 第3次安倍内閣	国際テロ情報集約室を設置 （国際テロ情報の集約、国際テロ情報の収集調査に関する連絡調整）
2018	平成30年8月1日 第4次安倍内閣	国際テロ情報集約室に「国際テロ対策等情報共有センター （現：国際テロ対策・経済安全保障等情報共有センター）」を設置 （内調を含む関係11省庁と連携し、テロ情報の共有・分析を行う）